

文化情報

演劇

■前進座創立95周年記念公演 「お久文七恋元結」

三遊亭圓朝の創作落語の傑作「文七元結」を元に、山田洋次監督が書き下ろした歌舞伎仕立ての新作喜劇。

「文七元結」は、大金の50両をなくした文七が身投げしてわびようとしていたところに長兵衛と出くわし…大混乱の末、最後にお久と文七が夫婦になるという人情ばなし。今回はその後の二人のアナザーストーリーで、お久と文七が運命的な出会いをし、お店や長屋の人々を巻き込んで大騒動を引き起こすラブコメディーだという。前進座でも千回以上上演され、山田監督にとっても思い入れのある「文七元結」。原作では、二人はまわりのすすめで出会ったばかりで夫婦になるが、その彼らが恋をしたらどんな喜劇に生まれかわるか楽しみだ。

◆5月30日(土)～6月7日(日) / 東京・池袋サンシャイン劇場 / 一等席1万1000円、二等席6500円、三等席4500円等。他特別料金・割引あり / 開始時間など詳細はお問い合わせください：前進座チケット専用ダイヤル0422-49-0300



医師が「個室(または少数数部屋)での管理が

必要と判断したときは、治療の一環とみなされて費用は発生しません。救急・術後患者で病状が重篤なため集中的な治療や安静が必要だったり、免疫力低下で感染症にかかるおそれがあるなど隔離が必要な場合からです。

「個室に」と言われた時は、「大部屋が空いたらすぐに移動したい」と医師や看護師に意思をはっきり伝え、記録を残しましょう。

納得ができない時は、支払いを終えた後でも、地方厚生局(右)に連絡し、相談しましょう。



知っておきたい

入院時の差額ベッド料

「病院からの請求書に『差額ベッド料』がありました。福井県鯖江支部の中野久子さんから編集部へメールが届きました。26年4月から、物価高騰などを背景に、多くの病院で差額ベッド料が改定され値上げされています。あらためて調べてみました。

請求書を見たら

「今年の1月に夫が亡くなりまして。その最後の入院の時のことです。夫は大部屋にいたのですが、病状が悪化し、亡くなる16日前に個室に移動しました。病院からの請求書をよく見ると『差額ベッド料』が4日分2万4000円請求されていたのです」と中野さん。

「おかしいと思った中野さんは、差額ベッド料について書かれた新聞記事を探し出し、それを持って病院に行き、「なぜ4日分請求されているのか? 病院の都合で個室に移動したのだから、差額ベッド料は請求されないのでは」と交渉しました。病院側は「確認してご連絡します」と。後日「差額ベッド料はいただきません」と連絡がありました。

差額ベッド料とは

中野さんは「入院時に同意書にサインをしましたが、声をあげたことで支払わずに済みました。おかしいと思ったことにはおかしいと言いましよう」と話します。

支払う必要のないケースは

厚生労働省は差額ベッド料について通知「保医発0327第10号」(24年3月27日)を出し、「患者への十分な情報提供を行い、患者の自由な選択と同意に基づいて行われなければならない」という旨を定めた高額医療費の対象になりません。

「個室じゃないのに請求します」と。後日「差額ベッド料はいただきません」と連絡がありました。中野さんは「入院時に同意書にサインをしましたが、声をあげたことで支払わずに済みました。おかしいと思ったことにはおかしいと言いましよう」と話します。

「個室に」と言われた時は、「大部屋が空いたらすぐに移動したい」と医師や看護師に意思をはっきり伝え、記録を残しましょう。

納得ができない時は、支払いを終えた後でも、地方厚生局(右)に連絡し、相談しましょう。

地方厚生(支)局

- 北海道厚生局(札幌市) 011-709-2311
- 東北厚生局(宮城県仙台市) 022-726-9260
- 関東信越厚生局(さいたま市) 048-740-0711
- 東海北陸厚生局(愛知県名古屋市) 052-971-8831
- 近畿厚生局(大阪市) 06-6942-2241
- 中国四国厚生局(広島市) 082-223-8181
- 四国厚生支局(香川県高松市) 087-851-9565
- 九州厚生局(福岡市) 092-707-1115

再婚後の暮らし



現在の太田村の中心部

私たちが兄妹は、昼間は四畳半にあって父の形見の机の周りでいつも三人固まっていた。兄二人は優秀でしたが、ある日、義兄と長兄が家の前で、地面を駆けまわつての大げんかに。周りを近所の人が囲み、母が「やめなさい!」と叫んでいました。数日後、長兄は母の末弟、兵庫県尼崎市の叔父の家で暮らすことになり、行ってしまいました。

会社と役場の人に強引にすすめられ、生きるため、釜山労働者と再婚した母(1948年)。新しい父となる人には私たちが兄妹と同じ年頃の三人の子とも祖父がおり、9人の生活が始まりました。再婚後は、さらに山の山の出来たばかりの社宅に越しましたが、新築と言っても六畳と四畳半、一五畳の廊下三畳ほどの土間がすべてでした。六畳に夫婦の布団と、私より3カ月上の義姉と義妹が一つの布団。四畳半には祖父と義兄、兄二人と私の五人が寝なくてはなりません。布団は三枚しか敷けません。行き場のない私はよく泣きました。祖父は優しく「じいと寝ようぞ」と誘ってくれ、祖父と寝るようになりました。「カチカチ山」「金太郎」などの童話を面白おかしく話してくれ、ケタケタ笑っているうちに眠る毎日でした。母は、4時半ころから起きて皆の弁当を作って、夜が明けるところ出勤。休みの日は、洗濯、縫い物などに追われ、いつ休んでいたのかと思えます。

母の歴史

聞き書き 高知県 中内理津子さんのお話 (3)